

# 読書会について

田中 英矩 \*

最終更新日：2025 年 8 月 30 日

## 概要

9 月 3 日（水）より，Gallagher & Zahavi, *The Phenomenological Mind* の読書会を行います。

## 1 目的

- 心の哲学・現象学・認知科学の主要概念を学習する。
- 心や意識の研究における既存の哲学的・科学的アプローチを知り，それらに対する応答として提起される方法論を理解し，検討する。
- 現象学と，心の分析哲学・認知科学との間の対話の現在を知る。

具体的にどういったことをするかについては，[各章の概要](#)をご覧ください。

## 2 概要

**使用テキスト** Gallagher, S., & Zahavi, D. (2021). *The Phenomenological Mind* (3rd ed.). Routledge.

非推奨ですが，第 1 版の邦訳（絶版）があります（石原孝二・宮原克典・池田喬・朴嵩哲 訳（2011）『現象学的な心 心の哲学と認知科学入門』勁草書房）。

**参加条件** 特になし。必ずしも美術部員のみに限る必要はないと思っています。

**初回開催日時** 9/3（水）10:30

**頻度** 基本的に週 1 回。できるだけ速いペースで回したいです。

**形式** 対面（希望に応じてオンラインを併用）

**場所** 大阪大学美術部部室

**持ち物** テキスト

---

\* [enescu.norimuji@gmail.com](mailto:enescu.norimuji@gmail.com)

**参加費** 無料（テキスト費用は各自負担。ただし備考も参照）

### 3 進行

輪読＋発表型のゼミだと思ってもらえれば大体合ってます。

各回は、発表（前半）とディスカッション（後半）からなります。おおよそ以下の手順で進みます。

1. 読書会の趣旨説明（初回、または新規参加者が来た場合のみ）。
2. 発表者が、作成したレジュメをもとに発表を行う（初回は、田中と齊藤が第1章の発表を行います）。
3. 発表後、オーディエンスによるレビューや質疑応答を行う。
4. 発表をもとに、全員によるディスカッションで、テキストや発表内容の検討を行う。
5. 最後に次回発表者を決め、次回までに読んでおく範囲を決める。

発表者は、次回までに次のことを行います。

- ・次回までに読んでおく範囲を読む。
- ・レジュメを作成する。レジュメでは少なくとも、テキストの該当範囲の情報をまとめます。もちろん、まとめに加えて、疑問点、追加情報、意見、自身の問題意識との関わりなども示せるととても良いです。

ただし、余力が許せば、どんどん先の内容も読んで発表していただいて大丈夫です<sup>\*1</sup>。

できれば毎回少なくとも1章ずつ進みたいのですが、1人が1章丸ごと担当するのは重いので、発表者を複数人指名し、担当範囲を分散することが多くなるでしょう。

強制ではありませんが、発表者以外であっても、なるべく多くの参加者がテキストの該当範囲を読んでおくことが望ましいです（が、無理強いはしませんので時間と相談してください）。

### 4 備考

- ・テキストは購入することを推奨しますが、入手に難がある方は田中までお声がけください。（ヒント：私は電子版を持っています。後は察してください。）
- ・ある程度固定的なメンバーがいた方がよいですが、一部の回だけ参加する人がいても良いと思います。
- ・ある回に参加できなかった人にも、内容が共有できるようにしたいです。

---

<sup>\*1</sup> 想定しているペース（週1・毎回1章ずつ）で順調に進んだとしても、終了までに2か月半かかります。

## 5 各章の概要

(テキスト第1章の各章概要に基づく)

- 第1章** 心に関する研究について、20世紀以降の動向を概観します。また、現象学とはどのような方法論であるかを見ていきます。
- 第2章** 心や経験を科学的に研究するための方法論を扱います。実験心理学や質的研究といった現場で、研究者は人の経験にどうアクセスするのか、また、現象学的なアプローチを具体的にどのように応用するのかを見ていきます。
- 第3章** 意識と自己意識について議論します。現代の心の哲学における、高次の意識理論をめぐる論争を概観し、意識の問題に対する新たなアプローチを提案します。
- 第4章** 意識や経験における時間性を探求します。ウィリアム・ジェームズの「見せかけの現在 (specious present)」の議論を、現象学の立場から再検討します。
- 第5章** 心の哲学の重要概念である志向性を取り上げます。私たちの経験は常に何らかの対象に向けられている、という志向性の考え方が、心の構造や、現代の心の哲学の論争にどう関わるのかを見ていきます。
- 第6章** 知覚について掘り下げます。身体性や行為との結びつきを重視する現代的なアプローチを整理し、表象説をめぐる論争や、知覚と想像の違いについて探求します。
- 第7章** 認知経験における身体<sup>1</sup>の役割を論じます。「生きられた身体」(Leib)と「客体的な身体」(Körper)の区別を手がかりとしつつ、身体のあり方が私たちの経験をどのように形作るかを探ります。
- 第8章** 人間の行為をテーマとし、「行為者である感覚」と「自分の動きである感覚」の区別について論じます。また、人間の行為は単なる身体運動に還元できないことを論じ、症例などを通じて、非病理的な行為のあり方を明らかにします。
- 第9章** 私たちがどのように他者の心<sup>2</sup>を理解するのかを探ります。既存の理論を検討しつつ、現象学に基づいた新しいアプローチを展開し、社会的な関わりについても考えます。
- 第10章** 哲学から神経科学まで広く議論される自己<sup>3</sup>とは何かという問いに挑みます。あらゆる経験の根底にある、前反省的な自己感覚に注目し、この基本的な自己が、言語や物語によって形作られる高次の自己へとどう発展していくのかを探ります。
- 第11章** これまでの総括を行います。